

令和元（2019）年度前期
授業評価アンケート（中間・期末）の結果と分析及び提言
—PDCA サイクルに向けて—

教養教育院総務委員会委員長
南川慶二

目的

大学教育に関しては、教育目的・目標の明確化やその到達度、さらに教育（授業）方法の改善や成績評価の適正化が強く求められている。そのために、学生と教員の双方に対してアンケートを実施し、徳島大学の教養教育について質的・量的に充実した授業の提供をめざすことを目的としている。第3期中期計画・中期目標を達成するためにも学生と教員の双方に対してアンケートを実施し、双方向のPDCA サイクルを確立し、徳島大学の教育目標を達成することを目的とする。

実施方法と時期

全学共通教育センターが実施していたアンケートを継承して平成28年度から始めた方法では、全科目群を3グループに分け（A:一般教育科目群、グローバル化教育科目群、イノベーション科目群、B:基礎基盤教育科目群、汎用的技能教育科目群、C:地域科学教育科目群、医療基盤教育科目群、外国語教育科目群）、1.5年サイクルですべての授業科目について中間アンケートと期末アンケートを実施してきた。3年が経過した平成30年度後期で2サイクルが完了したことに加え、分析結果が十分に活用されていなかったことを踏まえ、新たに設置されたプログラム評価委員会からアンケート実施方法の変更が提案された。総務委員会での審議の結果、毎回全ての授業科目群を対象とすること、中間アンケートは廃止し、期末のみに実施することとした。分析結果はプログラム評価委員会による授業改善へのフィードバックを予定している。令和元年度前期は、この新しい方法に従って全授業を対象に期末アンケートを令和元年7月9日～8月6日に実施した。教員に対しては、授業実施報告書の提出（令和元年9月末まで）として実施した。

結果と分析

1) 回収率

令和元年度前期の期末アンケート回収率は72%であった。中間アンケートを廃止したため、1年次の学生にとっては初めてのアンケート結果である。科目群によって差があり、最も低い医療基盤教育科目群で67%、最も高い地域科学教育分野で81%となった。個々の授業による回収率の違いも大きく、2年次に設定されている授業などでは回収率が非常に低いものがあった。中間アンケートを行う場合は後半の授業で対象学生に直接フィードバックすることができるが、期末アンケートのみでは授業の改善がなされたとしても回答した本人にはフィードバックがないことが一因と考えられるため、回収率の向上について検討する必要がある。

2) 教員の授業に対する取り組みについて

アンケートの自由記述コメントから、各教員が授業の内容や方法等に工夫を凝らしていることがわ

かる。従来型の講義のほかに、映像資料等を活用する授業や、アクティブラーニングを導入した授業が全般的に高評価を受ける傾向にある。たとえば、毎回グループワークや小テストがある授業で、受け身の授業よりわかりやすく知識が定着するという意見があった。その一方で、講義形式でも高評価を受けている授業もあった。課題演習や学生による発表等はほとんどなく、どちらかといえば「一方的」授業となっているが、質疑応答と振り返りのポイントが平均よりも高かった。自由記述コメントでは、教員の熱心さやゲストスピーカーの参加が良かった点として挙げられていたことに加え、わかりやすく面白い、思考力が身につく、認識が覆されるなどの意見があった。このように、一方的な講義形式でも学生が興味を持つ内容をわかりやすく語ることで高い評価が達成されていることがわかる。この例ではアクティブラーニングの要素が多いとは言えないが、質疑応答と振り返りのポイントが高いことから、学生同士の議論やペアワークよりも教員との対話により理解を深めることで満足感が得られていると考えられる。このことは、形式的にアクティブラーニングを取り入れるだけではなく、授業全体の設計が重要であることを示している。

基礎基盤教育科目群や医療基盤教育科目群の中には、高度な内容が含まれる講義があり、高校で未履修の部分を含む場合に学生が困難を感じている様子が伺える。知識不足を補うために教員が工夫したと見られる授業の一例として、期末試験で長文の暗記を課す授業があった。テストに出るところを教えてくれて良かったという意見と、暗記させられるだけでは役に立たないという意見が混在し、対応の困難さが感じられる。

外国語教育科目群では、個人発表やペアワークなどの実施率が高く、アクティブラーニングが効果的に行われている。ゲームや歌を取り入れるなどの工夫を凝らした授業もあり、楽しいという意見が多い。また、SNSで短い文章を毎週発信させるなど、インターネットを活用した試みもあり、授業外で気軽に学習できる機会として有効であると思われる。インターネット教材「スーパー英語」を用いた反転授業の例では、自学自習のポイントが高く、高校の復習ができて良かったというコメントが多数あったが、すでに理解している学生には復習ばかりで退屈するという意見も少数ながら存在した。反転授業を取り入れる場合には学生の理解度も考慮する必要が感じられる。語学の授業は少人数クラスで行われ、全般的に学生の満足度は高い傾向にあるが、一部に40人程度の授業で「人数が多すぎる」というコメントもあった。同じ学科で異なるクラスに分かれる場合に、課題の量や試験の難易度に差が生じることに不満を訴えるコメントも見られた。基礎基盤教育科目群などの必修科目にも同様のことがあり、何らかの調整が必要かもしれない。

3) 学生の授業に対する意識

これまでのアンケート結果と同様に、学生自身の受講態度は評価が高く、自学自習時間は短い傾向にある。一般教養教育科目群では、大人数講義が多いこともあり、熱心な学生と不真面目な学生との意識の違いが表れやすい。評価の高い大人数の授業のコメントで、ある学生は充実した講義内容を良い点として挙げている一方で、「聞いているだけで楽だった」というコメントも見られたことから、学生からの高い評価には学生の意識の分布も影響していると思われる。他の学生の私語が気になるというコメントもいくつかあり、熱心な学生の意欲を妨げないための工夫も必要である。定員を超える授業では、抽選で受講者を決めていることについて、「本当にこの講義を受けたい人全員に受けさせてあげるようにしてほしい」という意見があった。学生の意欲を事前に推し量ることは困難であるが、単純な抽選以外の方法も考える必要があるかもしれない。授業の実施方法については、e-learning (manaba)を利用して資料の配布や課題提出を行っている授業が増加しており、紙媒体よりも便利と感

じている学生が多いようである。

4) 講義室の環境について

自由記述欄の改善要望には、講義そのものではなく、講義室の環境に関するものも多く見られる。冷房を入れ始める時期が遅いなど空調についての意見は例年と同様であり、何らかの対策が必要と思われる。今年度から BYOD により学生がパソコン等の端末を用いて講義室でインターネットに接続する授業が増えたことで、インターネット環境の不備についてのコメントも見られた。たとえば、パソコンを使った授業なのに Wi-Fi が届かない教室での授業だったというコメントが代表的である。すべての講義室で定員分の接続ができるようになっていないため、設備の整った講義室に多数の利用者が見込まれる授業を優先的に割り振るなど、事前に調整する必要があると思われる。また、DVD や CD などの視聴覚教材を使う授業で、機器の不調で使用できなかった例が複数見られた。蔵本地区の学生を対象とする一部の授業では、一つの授業のためにキャンパス間の移動が必要で負担が大きいと指摘があった。時間割の調整や、対象学科のキャンパスで開講することなども検討の余地がある。

総括

全ての科目群で一斉に実施したことから、科目群による傾向の違いがある程度明確化された。アクティブラーニングは特に外国語教育科目群で多くの取組みがなされており、学生の満足度も全体に高いように思われる。一般教養教育科目群に多い大人数クラスにおいてもアクティブラーニングを取り入れた授業が多数開講され、授業の実施形態が多様化している。また、従来型の講義形式をとっていても学生から高い評価を得ている授業もあり、教員の工夫と努力が感じられる。調査項目の中で、自学自習だけが低い評価になっているのは全ての授業で共通している。1.5 時間の講義に対して予習復習 3 時間という単位制の実質化は現状の過密な時間割では困難と思われるため、カリキュラムの見直し等も含めた根本的な対策が必要と考えられる。